九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中央語と鹿児島方言における「動詞連用形＋サマニ」の史的展開

久保園，愛
日本学術振興会 ： 特別研究員(DC2) | 九州大学大学院人文科学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/26940

出版情報：語文研究. 112, pp.17-33, 2011-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

中央語と鹿児島方言における「動詞連用形＋サマニ」の史的展開

久保薗　　愛

1．はじめに

古典語では、次のように動詞連用形に接続する「サマニ」という形式が見られる（以下、この形式を単に「～サマニ」と表記する）。

（1）　a　実盛が錦の直垂を今度着まらしたことは、都を出さまに（desama ni）宗盛へ参って申したは…（『天草版平家物語』巻３）

　　b　ソコテチャレ事ヲ云テケシヤウシテ土ノ方カラ芍薬ヲヤツタソ。別レサマニ芍薬ヲヤツタソ（『毛詩抄』巻４・45ウ）

「サマ」は、後述するように恐らく名詞であろうと考えられるのだが、（1）は、いずれも連用形に接続し、時間を表す形式となっている。

この「～サマニ」について青木（2010）は、「連用形＋サマ」に助詞「ニ」を伴うことで「～する時に、～しながら」といった接続関係を表すと述べ、中古・中世頃には「～サマ」と清音であった可能性を指摘している。

一方、現代共通語を見てみると、次例のように接続関係を表してはいるのだが、「～するや否や、～した瞬間」という前件の事態が終了した直後に後件が生じることを表す形式となっている。

（2）　a　ジャッジ２人が最大６ポイント差をつける勝利がコールされた次の瞬間、振り向きざまに、セコンドの兄・興毅と強く抱き合った。
（スポーツ報知　http://hochi.yomiuri.co.jp/sports/box/news/20100208-OHT1T00101.htm）

　　b　犯行手口は、86.6％が被害者の後方から近づいて、追い越しざまにバッグ等をひったくっています。
（警視庁ＨＰ　http://www.keishicho.metro.tokyo.jp/seian/bouhan/bouhan1.htm）

古典語「～サマニ」と、形態的に類似しており意味的にも「時」に関わることからつながりがあると思われるのだが、現代共通語のような意味はどのようにして生まれたのだろうか。また、そもそも「動詞連用形＋サマ」に「ニ」を伴ったものがどのようにして「時」を表すようになったのかについても述べた

ものは見あたらず、歴史的に考察する必要があるように思われる。これが本稿の目的の一つ目である。

もう一つは、方言と中央語との関わりについてである。以下の例を見られたい。

（3） 雨が降っセー、洗濯物が濡れた。(注1)

上村（1960）などの先行研究によると、この形式は中央語の「～サマニ」に由来すると指摘されているのだが、上に見た古典語の例（＝(1)）とも現代共通語の例（＝(2)）とも意味・用法が異なっている。鹿児島方言においてどのように展開したのか、現代方言の様相と方言文献に見える例から通時的に考察する。

2．中央語に見られる「～サマニ」の変遷

2．1．上代～中古の「～サマニ」の様相

上代において、今回見た限りでは「動詞連用形＋サマニ」と思われる確例は見られず(注2)、中古に入って見られるようになる(注3)。まずは動詞連用形に接続する「サマ」の例から確認しておこう。

（4） a 桐の木の花、むらさきに咲きたるはなほをかしきに、葉のひろごりざまぞ、うたてこちたけれど、こと木どもとひとしういふべきにもあらず。（『枕草子』37段）

b さきざき、御覽ぜしにはあらぬ手の、いますこしおとなびまさりて、よしづきたる書きざまなどを、いづれかいづれならむとうちも置かず御覽じつつ…（『源氏物語』椎本）

c「さらなり。そのほどは宣旨の君ぞ、くはしうは、道芝に知り給つれ。女の御さまの、すゝみざまなりける」といふに、（『夜の寝覚』巻３）

中古においては、上の例のような「ニ」を伴わないものが大半であり、様態を表す「～の様子」といった意味で用いられる。「～サマ」全体としては名詞であり、主語（＝(4a)）や目的語（＝(4b)）、あるいはコピュラを伴って述語として働く（＝(4c)）(注4)。

それが次例のように「ニ」を伴うことで副詞的な働きをするようになる(注5)。

（5） a 集まりてとく下さんとて、綱を引きすぐして、綱絶ゆるすなはちに、（中納言は）八島の鼎の上に、のけざまに落ち給へり。（『竹取物語』７燕の子安貝（いそのかみの中納言の話））

b 女は、身を常に心づかひして守りたらむなん、よかるべき。心やすく

うち捨てざまにもてなしたる品なき事なり。（『源氏物語』常夏）

c　住まひけるさまなど、げに都のやむごとなき所どころに異ならず、艶にまばゆきさまは、まさりざまにぞ見ゆる。（『源氏物語』明石）

d　同じ中納言、かの殿の寝殿の前にすこし遠くたてりける櫻を、ちかくほり植へたまひけるが、かれざまにみえければ、…とよみたりける。（『大和物語』74段）

（5a）は、落ちるときの主体の姿勢を表しており、「あおむけの状態で落ちた」と解釈できる。（5b）は、もてなすという動作の仕方について「捨てざま」と述べている。（5cd）は、主語について「住まいがまさったように見える」「桜が枯れたように見える」と解釈される。いずれも「～サマ」自体は「～の様子、状態」といった意味であり、そこに「ニ」を伴うことで、「～サマニ」という前件が後件の主体の姿勢や様子などの付随的な状態を表す副詞的な成分として働いている。この用法を【付帯用法】と呼んでおく。

前接動詞を見てみると、主語や目的語として用いられる「ニ」を伴わない「～サマ」は、動作動詞に接続する例がかなり存するのだが（注４参照）、副詞的に働く「～サマニ」の場合は、前接動詞が姿勢などを表す主体変化動詞や状態動詞に偏る。主体変化動詞は、動作ではなく主体の変化の側面に注目する動詞である。また、状態動詞であるということは、存在や特徴など、主体の状態を表すものである。ここでみた主体変化動詞や状態動詞に接続する「～サマニ」は、前件の変化結果が主体に存している状態、あるいは状態動詞が表す主体の状態で、後件が行われることを表している。つまり、「～サマニ」を含む文は、前件が後件のあり方を修飾・限定するものであると言えよう。(注6)

ところで、中古の「～サマニ」には前件が後件時の主体の付随的な状態を表していない例が４例ほど見られる。

（6）　a　ことに僧などは、なべてのは召さず、才すぐれ、行ひにしみ尊きかぎりを選らせ給ひければ、この禅師の君、參り給へりけり。帰りざまに立寄り給ひて、「…」と言ひて、やがて出でたまひぬ。（『源氏物語』蓬生）

b　男の童三四人、さては、この兄とぞ、ありける。ませにはあらねど、先立ちをくれて來ける。（女は）詣でざまに困じにければ、兄いとおかしがりて、…（『篁物語』）

c　くだりざまにあはぢのゑしまを、面白しと聞おきたる所也、かゝる次にみんとておはしましたりけるに…（『散木奇謌集』６　詞書）

これらは、(6a)「帰るときに」、(6b)「詣でる時に」などと解釈できる。前件と後件の関係を見てみると、「～サマニ」の文が表すものは、主体の状態ではなく、前件の動作が起きている間に後件の動作が起きるというものである。この場合、前件の動詞を見てみると、主体変化動詞ではあるが、姿勢や主体の状態を表す動詞ではなく、主体の移動といった動作の面が取り出せる動詞になっている。これは、後述する中世以降に特に多く見られる用法で、前件と後件の同時性を表していると見られる。

２．２．中世～近世前期の「～サマニ」の様相

中世に入ると、(7)のような【付帯用法】も見られる一方、中古にわずかに見られた前件と後件の同時性を表すタイプの例も多く見られる（=(8)）。特にこの傾向は中世後期に顕著である[注7]。

(7) a 信連長刀にのらんととんでかゝるが、のりそんじてもゝをぬいざまにつらぬかれて、心はたけくおもへども、大勢のなかにとりこめられて、…（『平家物語』巻４）

b 父ノ頚ヲウチ落テ、其太刀ヲ取直テ、鐔本マデ己レガ腹ニ突貫テ、ウツブシザマニゾ臥タリケル。（『太平記』巻10）

c 僧正は、例のことなれば、衣ぬぐ程もなく、例の湯殿へ入りて、「えさい、かさい、とりふすま」といひて、湯ぶねへ躍りいりて、のけざまに、ゆくりもなく臥したるに…（『宇治拾遺物語』37 鳥羽僧正與国俊たはぶれの事）

d 一飯相邀事モテナサハナケヤリサマニセイテヨウ米ヲツイテヨウ炊テネンコロニセヨソ。（『四河入海』巻３ノ２・58ウ）

(8) a 左馬頭悦テ、馬ノ内跨ニユラリト飛乗テ、鞍坪ニ直リ様ニ、「…」ト、互ニゾ褒返サレケル。（『太平記』巻39）

b 又或時、弟子共ニ語テ云、「…杵一ニテ、臼二ツ搗ベキ様アリ。一ノ臼ハ、常ノ如ク置キ、一ノ臼ハソラニ、下ニ向テツルベシ。サテ、キネヲ、アゲ下ザマニ、二ノ臼ヲツク」ト云。（『沙石集』巻５）

c 周公ハ都ニナウテハカナハヌホトニ禽ト云ヲ魯ヘ下シマラセレタソ。下シサマニ伯禽ニ戒メラルゝ詞ソ。（『蒙求抄』巻５・17オ）

d 孫叔敖カ死ニサマニ其子ニ云イ置ソ。（『四河入海』巻11ノ１・４ウ）

e （主）太郎くわじやいたかやひ（常のことく右のとをり云てしか〳〵）（主）さて夜立さまに、なんぢにものをわたひたが、それはあるか。

（『虎明本狂言』かうじ 台詞）

（7a）は「縫ったように貫かれた」、（7b）は「うつぶせの状態で倒れた」、（7c）は「仰向けの状態で臥した」、（7d）は「投げやりな様子でもてなさずに」という意味に解釈できる。（7）の例は、いずれも後件の動作が行われるときの主体の姿勢や様子を表す【付帯用法】と見られる[注8]。

一方、（8）の例は、主体の付随的な状態を表すものではない。（8a）（8b）は「～しながら」、（8c）～（8e）は「する時に」と解釈でき、前件と後件の動作が同時であることを表している。これらの用法を【同時用法】と呼んでおく。ただし、同時を表すといっても、細かく見ると２つに分けられるように思われる。

例えば（8a）を見てみると、前件の「直る」動作を行っている間に後件の「誉める」動作が行われる。前件が先に生じ、それが終了するまでの間に後件が生じているものである。もう一つは、（8d）のようなものである。「死ぬ」動作と「言い置く」動作は、ほとんど時を置かずに起きるのだが、「死ぬ」動作はまだ開始していない。死に始めてから死に終わる間に後件が生じるのではなく、「死ぬ」という場面中において後件の「言い置く」動作が行われている。つまり前件の表すある場面において、後件がなされるというものである。

いずれにしても前件の示す動作の最中や場面中において、後件の動作が行われるという意味では動作の同時性を表すものであり、後件の行われる時の主体の状態を表す【付帯用法】とは少々異なる用法である。

また、中世末には、次のような「～するや否や、～した瞬間」と解釈できる例もわずか２例ほどであるが見られる。これを【即時用法】と呼んでおく。

（9）　a「わが目の前で、別の妻などを持たせてはあられうものか？ とかく余の女房をシャントの家へ入れ立ててはなるまい。ただ行け」と言いさまに、取るものも取りあえず、走りぢだめいて家に帰り、…（『エソポのハブラス』）

これは、前件が終了した直後に後件が起こるものであり、先の【付帯用法】とも【同時用法】とも異なっている。

近世前期上方語[注9]を見てみると、前代までの【付帯用法】【同時用法】に加え、この【即時用法】が少しずつ見られるようになる[注10]。

（10）　a　のぞミの人有て立より、それなる上臈面を見たきよしこひければ、のうれんの内より、いかにも色くろくたくましき男の、手にもちさし出しさまに、代ハ五百でおじやらしますといひけり。（『醒睡笑』巻５ 姥心）

b　彼女郎舟にのりさまに私語しは「こなたは日本の地に居ぬ人じや」と申ける。（『好色一代男』巻３）

c　いや、此中天王寺参に、こしかけたばこをのミ、茶を呑てたちさまに、それ、茶の銭となげいだせバ、茶の銭ハ請取ました。（『軽口御前男』巻２ 博痴宿の吟味）

（11）a　豆腐二三でうを田楽にせしか、人おほなり。…小児たへかねて、茶うすんといひさまに、二つ三つとり事ハ。（『醒睡笑』巻６ 児の噂）

b　飴売者の棚のまへに、飴買ふと立より見て、是はむさうはないか。どうやらむささうなといへハ、あめうりがいふ事は、是がむさからふ事ハ、なるほどきれいに御座るといひさまに、手ばなをつんとかふでから、おのれが手にとりてくふて見せて、是がむさいかといふた。（『当世口まね笑』第３・３ 小倉三官飴売の事）

（12）a　かくて親王屋形に入らせ給ひければ。姫中門に出で向ひ及ばぬ雲の上人を。賤が伏せ屋の御設け恐れ多しとばかりにて。俯向（うつむ）きさまに御顔を。じろりと見たる上瞼（フシ）是恋知りの目癖ぞや。（『用明天王職人鑑』）

b　中納言ミつから貝を取へしとて、籠に乗てつられあがりうかゞひ給ふに、（中略）すハ貝取たり、篭をおろせよと宣ふ。皆ゝあつまり、とくおろさんと、綱を引過して、綱切たりけれバ、鼎の上へのけさまにおち給へり。（『噺物語』中納言子安貝物語）

（10）は、「～ながら、～する時に」と解釈できる【同時用法】であり、（11）は「～するや否や、～した瞬間」という【即時用法】、（12）は「～の状態で…する」という【付帯用法】である。近世前期では、【同時用法】が大部分を占める。また、中世末からわずかに見られた【即時用法】も、接続する動詞は主に「言う」に偏るが見られるようになってくる。（注11）その一方、主体の状態や姿勢を表す【付帯用法】は、用例数も13例と他の用法に比して少なくなっており、「続ける」「あふのく」「のく」「うつむく」の場合のみ【付帯用法】と解釈できる。

また、近世前期上方語の「～サマニ」について注目すべきは、助詞「ニ」を伴わず「～サマ」だけで「時」の意を表せるようになることである。

（13）a　あまりのうれしさにむねせき上てゐたりしが、ふるい〳〵、此帯ハ何でござるといふ。繻子でござるといへば、繻子とハきよくもないといひさま、くちをすふた（『軽口大わらひ』巻５・17 小僧若衆に恋暮の事）

b　かへりさま迄、女郎の名をとはざる人は、かならず暦暦なり。（『好色

一代女』巻２）

(13) の例は、「サマ」そのものの意味変化を示している。中古において、つまり本来的には「動詞連用形＋サマ」の形態では様態を表しており、時間に関わる用法（【同時用法】【即時用法】）を持ち得なかった。しかし、「～サマニ」の形で多く前件と後件の時間関係を表すことができるようになったことで、「動詞連用形＋サマ」そのものに「時」の意味が付与されたと考えられる。(注12)

２．３．中央語に見られる「～サマニ」の変遷

ここまで通時的に見てきた「～サマニ」の様相について、次のようにまとめることができる。「～サマ」は、中古においては様態を表す名詞であり、「ニ」を伴って初めて副詞的に働くことができた。その後中世に入り、【付帯用法】とともに前件と後件の動作の同時性を表す【同時用法】が多く見られるようになった。さらに、前件が起きた直後に後件が起きるという【即時用法】も現れる。近世前期上方語に至っては、【同時用法】が大部分を占めるようになり、前代に比して【即時用法】も見られるようになる。また、「ニ」を伴わない「～サマ」の形でも時間を表すことが可能になった。意味の上から、中世末から近世前期上方語に見られた【即時用法】が現代共通語につながるものであると考えられる。

３．変化の要因

では、「～サマニ」の担う意味の変化は、どのようにして起こったのか。

まず一つめは、後件発生時の主体の付随的な状態を表す【付帯用法】から動作の同時性を表す【同時用法】の発生についてである。

この問いには「～サマニ」の展開に答えを求めることができよう。先にみたように、【付帯用法】の「～サマニ」は、中古において主体変化動詞（特に姿勢を表すもの）や状態動詞に接続し、その状態を保ったまま後件の動作が行われていた（＝(5)）。ところが、「～サマニ」が主体変化動詞の中でも移動を表すような動詞や動作動詞、つまり特定の主体状態を具体的に想起せずともよい動詞に付くようになると、付随的な状態ではなく「時」の意味で解釈されるようになる。

たとえば、「のく（仰向けになる）」「枯れる」という動詞を考えてみると、これらは必ず結果として具体的な主体の状態変化が想定されるものである。「のけさまに…」「枯れさまに…」はその想定された状態のまま後件が起きる、つま

り前件が後件のあり方を修飾・限定していた。一方、「帰る」という動詞は主体の位置変化を表す動詞である。もと来た場所への主体の移動という位置変化はあるものの、「帰る」ことによって生じる主体そのものの状態変化を具体的に想定せずともよい。そのため、後件が行われる際の主体の付随的な状態という解釈が積極的にはなされなくなり、後件のあり方を修飾・限定しなくなる。

後件の動作が行われるときの付随的な状態ということは、普段は背景化しているのだが時間的には前件と後件とは同時である。こういった移動を表す変化動詞や動作動詞などにも接続できるようになることで、「～サマニ」の表していた主体の付随的な状態という意味の背景にあった時間的同時性の意味が前景化され、それが「～サマニ」の意味として捉えられるようになった。そのようにして出来たものが【同時用法】であると考えられる。

次に、近世に入って多く見られるようになった【即時用法】の発生について述べたい。【即時用法】は【同時用法】がかなり見られるようになってから現れた用法である。【同時用法】は、前件の事態が起きている間に後件の事態が起こる、というものであった。ところが、前件が極めて短時間に終了してしまう動作である場合、前件と後件は同時には起こりにくい。先に挙げた近世前期の例（＝(11)）のように、「言う」などの動作は、おおよその場合、一瞬で終わってしまい、「～する時に、～しながら」といった意味にとれなくなることがある。

中世に発生した【同時用法】は「同時」といっても、多くの例は、前件の事態が先に生じ、その事態が継続している間に後件の事態が起きるというものであった。その場合、前件が先に起こるとしても、前件と後件の事態発生の間にそう大きな時間的乖離はない。したがって、前件が一瞬で終了してしまった場合、前件終了の直後に後件が起きることになる。そこで、「～するや否や…、～した瞬間」という同時性とは異なる意味を表すことになったと考えられる。それが【即時用法】である。

このように、【同時用法】及び【即時用法】は、いずれも後件時の主体の状態を表していた「～サマニ」が、種々の動詞をとれるようになったことでその意味を少しずつ変化させたものであると言えよう。

４．鹿児島方言における「～サマニ」

４．１．現代鹿児島方言の様相

ところで、現代鹿児島方言にはこれまで見てきたような「～サマニ」と関連すると言われる「～セー」という形式が存する。早く上村（1960）が指摘する

ように、「～セー」の分布地域周辺に「～サメ」「～チャメ」「～サエ」などの語形が存することからも、この「～セー」は中央語の「～サマニ」に由来すると見て良さそうである。(注13) しかし、鹿児島方言の「～セー」の用法は中央語や現代共通語に比してかなり広く、共通語の接続助詞「テ」に近いものとして用いられている。まずはこの「～セー」の用法について見てみよう。

現代鹿児島方言における「～セー」の用法を確認するために調査を行った。(注14) 次の表を見られたい。

（表）

	年齢	1. 対比	2. 前触	3. 付帯状態	4. 原因理由	5. 並列	6. 手段方法	7. 逆接	8. 継起
鹿児島市喜入町	70				○				○
鹿児島市喜入町	76	○	○			○	○		○
鹿児島市喜入町	46	○	○		○	○			○
鹿児島市喜入町	37	○	○		○	○			○
指宿市西方	68			○	○				
指宿市十二町	57	○	○	○	○	○	○	○	○
日置市伊集院町	86				○		○	○	
鹿児島市	81	○			○	○		○	○
川内市	69	○	○	○	○				
垂水市	83					○		○	○
垂水市元垂水	84	○	○	○		○	○	○	○
鹿屋市	84				○	○	○	○	○
垂水市	76	○	○		○	○	○	○	○
垂水市本町	79	○	○	○	○	○	○	○	○
計		9	8	5	11	10	7	8	11

1から8までの分類は、日本語記述文法研究会編（2008）のテ形の分類によった。調査例文は筆者の作例である。面接調査において「～セー」を使用した男性6名、女性8名の計14名から当該形式が得られた文に○を付している。これを見ると、それぞれの用法における使用の可否にばらつきはあるものの、「テ」の位置に用いられており、共通語「～サマニ」よりも用法が広いことがわかる。特に「原因理由」「並列」「継起」などで、よく用いられることを示している。(注15)

4．2．方言文献から見た「～サマニ」

では鹿児島方言を歴史的に見た場合はどうだろうか。方言文献から通時的に鹿児島方言の「～サマニ」の用法を見てみよう。

まず上村（1960）でも挙げられていた『大和口上物語集』の例を再度検討し

てみたい。この資料は、奥里（1938）によると、薩摩藩あるいは首里王府の役人の手になるもので、琉球に伝わる短篇伝説２編を収録したものである。奥付などは存せず、その書体から元禄頃に成立したと推定される。九州方言学会編（1969）では、その言葉は、元禄前後の京阪語を主体として鹿児島方言が混入していると述べる[注16]。資料原本は戦火で失われているため、奥里（1938）の翻刻を利用した。

（14） a （畑にころがった金銀を見て）女房（ニョウバウ）よろこびさまに、勝連按司（カツレン）へ人（ヒト）を遣（ツカヒ(ヤツ)）て、人馬（ジンバ）を雇入（ヤトヒイツ）て、そのかねを取収させ…

（15） a このむす子は、十四五歳に成出て、何んぢやい家業（カゲウ）とてもせず、毎日つりなんどしさまに日を送り、先づそうらくものと見（ミ）えました。

b （勝連按司の家来たちは）さてもをかしいものである。もしばけものにだまされたか、気違（キマガヒ）ものか、はやう追出せもどれ〳〵とちから足なんどしさまに追立ましたや。

（16） a （天女は羽衣の在処を知り）これは仕（シ）すましたりとよろこび、一気蔵（イッキクラ）へ上（ノボ）り、羽衣（ハゴロモ）をとり出（ダ）し、（は）やく着（キ）さまにそらへ飛上（トビノボリ）たや。

b そこの家中（カチウ）家来（ケライ）や下部（シモベ）や、かはつたものが来たといひさまに、かつとしう出（デ）て来（キ）て、…

（17） a （天女を）ひそかに覗（ノゾイ）てみようといひさまに、ものこしからすき目をしたや。

b そのころ勝連按司（カツレンアンジ）に、無比類よか女上（ムスメジヤウ）がをると聞きさまに、あちらへはへいて、…

（14）の例は、「喜んで人を遣って」と解釈出来る。これは、後件の動作を行う時の主体の状態を表していることから、中央語で見られた【付帯用法】にあたると考えられる。（15）の例は「釣りなどをしながら生活し」「ちから足をしながら追い立てた」という意味であり、前件と後件の動作の同時性を表していると見られる。これは、中央語でも見られた【同時用法】と同類と考えて良さそうである。（16）の例は、「早く着て空へ飛び上がった」「…と言って次々に出てきて」と解釈でき、中央語に見られたような【即時用法】に近い[注17]。

一方、（17）の例は、「…と言って覗いた」「…と聞いてあちらへ這い入って」と解釈出来るもので、前件と後件の間にそう大きな時間的差はないが、即時的な用法ではない。前件と後件の先後関係を表す継起的な用法と解釈できる。この用法は、これまで見てきた中央語には見られない用法で、恐らく鹿児島方言において独自に展開したものと見られる。

このように、『大和口上物語集』の「～サマニ」は、近世前期上方語の「～サマニ」の３つの用法と共通した用法を持つ一方で、継起といった異なる用法も持っていることがわかる。

次に、幕末の言語資料として岩山トク氏の談話資料を取り上げる。この資料は、西郷隆盛の義妹岩山トク氏の音声テープである。中村（2001）及び（2004）によると、岩山トク氏は、安政３年（1856）生まれの生え抜きの薩摩語話者であり、録音日時は昭和27年（1952）６月21日であるが、「トク氏の言語形成期は江戸時代末期である（中村（2004））」として、19世紀の鹿児島方言資料とされている。現在、鹿児島市「維新ふるさと館」に保管されている（以下、「岩山資料」と称する）。

岩山資料には、「～セー」という形式が18例見られる。(注18)

(18)　アノヘンノ　シノ　ヤ、ムカシャ　オトノサン　オトーイ　チュート、コン　ワッノ　ミゾイ　ミナ　カガンセー　オジギオ…。
（あの辺の人達は、昔はお殿様のお通りというと、この脇の溝に、みな屈んでお辞儀を…）

(19)　a　ソン　オトートサンノ　アッパイ　ヤシキ　イタッセー、タッモンノ　オセッ　キタイ。
（その弟さんが、やはり屋敷に行って、焚き物を背負ってきたり。）

b　ホイデ　オンセンニ　キタ　シガ　ドンナ　カタ　ジャロカイ　チミロチシッセー　ナ、オユン　ナカンドン　ヒトイ　コー　ミガ　ナラン。
（それで、温泉に来た人たちが、（西郷さんは）どんな方だろうかと見ようとしてね、お湯の中でも一人もこう、見ることができない。）

c　ウラニ　ガケガ　ゴワッセーナ、ソン　ガケノ　シテエ　ナ、ニワニナ、ムシロオ　ヒイテ、ソシテ　アーユー　ワランジオ　ツクイカタ。
（裏に崖がございましてね、その崖の下にね、庭にね、（西郷さんは）むしろを敷いて、そしてああいう草鞋を作っている。）

(18) は、前件「屈む」が、後件「お辞儀をする」ときの、主体の姿勢を表している。つまり、前件が後件の付随的な状態を示しており、中央語で見た【付帯用法】にあたる。一方、(19) は、いずれも中央語の用法とは異なるものである。(19a) は前件「屋敷に行く」という事態が起きたあと、後件「焚き物を背負う」事態が起きるという継起を表している。(19b) は前件「見ようとした」と後件「見ることができない」が逆接の関係になっている。また (19c) は前件と後件

の間に時間的にも因果的にも関係がなく、それぞれ別の事態が存在していることを表す並列関係にあると見られる。

岩山資料を概観してわかるのは、「～セー」は前件と後件をつないでいるのだが、そのつなぎ方はテ形のようにかなり文脈に依存して意味が決まっているということである。特に逆接や並列関係を表す「～セー」は中央語の「～サマニ」には全く見られず、鹿児島方言で発達したものであろう。これらの用法が見られるということは、現代の様相とかなり近い。ここから、少なくとも、幕末頃には現代鹿児島方言と同じような様相であっただろうと推測できる。また、『大和口上物語集』では前件と後件で主語が一致していたが、岩山資料では異主語を取る例が見られる（＝(18ｄ)）。これも現代の様相に近いと言えよう。

４．３．鹿児島方言における「～サマニ」の変化

ここまで、方言文献に見られる「～サマニ」に由来する形式を見てきた。ここで、その結果を踏まえて意味変化の過程について少し考えてみたい。先に挙げた上村（1960）は、この「～セー」の意味変化について次のように述べる。

(20)　要するに鹿児島方言の「セー」言葉は「さまに」から出て、意味は、…スルヤ否ヤ、…ト同時に(原文ママ)…シナガラをへて、ついに…シテの意味をもつようになって、接続助詞「て」の位置に使えるようになったものである。

つまり、本稿で述べた【即時用法】から【同時用法】を経て、テ形と同様に使用できるようになったと主張するのである。

しかしこれまで見てきたように、少なくとも中央語においては「～するや否や、～した瞬間」といった【即時用法】は原義ではない。当初見られたのは【付帯用法】であり、そこから【同時用法】【即時用法】が生まれたのであった。

それを踏まえて、方言文献に見られた例を振り返ると、中央語の【付帯状況】【同時用法】及び【即時用法】に相当する用法（＝(14)(15)(16)(18)）が見られた一方で、中央語とは異なる用法（＝(17)及び(19)）も見られた。この中央語と異なる用法は、恐らく鹿児島方言において独自に発達したものとみられる。そうすると、中央語の「～するや否や」の意味を持つ「～サマニ」の【即時用法】が【同時用法】へと変化し、「～テ」の領域に進出したのではなく、中央語の「～サマニ」相当の各用法を持ちつつ、一方で独自に「～サマニ」の意味変化がすすんだものが、現代鹿児島方言の「～セー」であろうと考えられる。

5．おわりに

本稿で述べたことをまとめると以下の通り。

(21) a 中央語において「～サマニ」は、接続する動詞の種類によってその意味を変化させ、【付帯用法】から【同時用法】、さらに【即時用法】が生まれた。

b 鹿児島方言に見られる「～セー」の用法は、中央語の「～サマニ」の用法を発展させたものと考えられ、幕末頃には現代とほぼ同じ様相であった。

本稿では、中央語史と方言の関わりについて述べたが、小林（2004）では方言形成論という観点から、東西方言における意味変化について、東日本は中央語から受容したものを独自に再生産し、新しい形式や意味として広まりやすい地域であり、一方の西日本は伝播した古態をそのまま保存しやすい地域であると指摘している。今回扱った「～セー」がこういった方言形成の地域差においてどのように位置づけられるのか今後考えてみたい。

また、中央語史に関しては、近世前期上方の時点で現代に繋がる用法が見られたことから、今回は近世後期以降の考察を一旦措いている。「～ザマニ」と連濁する点や、「振り向く」「追い越す」などの複合動詞に限って接続するようになる点など、近世後期以降に起こったと考えられる興味深い点が残る。これらについては今後の課題としたい。

（注１） 例文は筆者が作成した共通語の文を、鹿児島方言話者（南さつま市在住の女性。82歳。外住歴は２年未満）に方言訳してもらったもの。

（注２） ただし、上代には連用形が接続する「サマ」として、「アリサマ」と読むとされる「状」「消息」などが存在する。

（ⅰ）即ち其の衿を握りて控き出して、刀を抜きて打ち殺したまひき。亦其の兄白日子王に到りて、状（ありさま）を告ぐること前の如くなりしに、緩なることも亦、黒日子王の如くなりき。（『古事記祝詞』下巻）

（ⅱ）兼、國裏を巡りて消息（ありさま）を觀察しに、八代の郡の白髪山に到りて、日晩れて止宿りき。（『肥前国風土記』総記）

中古以降、「アリサマ」は多数存在し、この語に限っては意味的な変化が見られないため、これ以降考察の対象としない。なお、上代の文献の読みは、日本古典文学大系に拠った。

（注３） 用例収集にあたって、「様」という漢字表記のものは採集せず、仮名表記のものを対象とした。中古において、漢字表記の例は数が少なく、仮に考察対象とすべきであったとしても、大勢に影響はないと判断した。中世の場合も同じように扱った。近世については注10に注記した。

（注４） 「ニ」を伴わない「～サマ」に接続する動詞は以下の通り。数字は用例数を表す。

うつす（2）、おとしむ（1）、劣る（3）、生ふ（1）、織る（3）、掛かる（2）、書く（23）、す（11）、しつらふ（1）、死ぬ（1）、すすむ（1）、そむく（1）、反らす（1）、反る（1）、立つ（他）（1）、つくる（10）、靡く（1）、縫う（1）、上る（1）、ひろごる（1）、見る（2）、向かふ（1）、もてなす（1）、酔ふ（1）

なお、「酔ふ（1例）」「書く（1例）」については、次に挙げるように「ニ」を伴っているが、明らかに補語であるため、こちらに入れた。

（ⅰ）おとゞ「イといみじきものぞや。さばかり亂れて、はしたなかりつるに、こと人の醉ヒ様には似ずかし」などの給ヒて、二所うち臥し給フ。（『宇津保物語』俊蔭）

（ⅱ）「これぞ聞ゆる宮の御文よ。かゝる御書きざまに、いみじき言の葉を盡し給は、いかならんひらきのゐしか靡かざらん」（『篁物語』）

（注5）「ニ」を伴う「～サマニ」に接続する動詞は以下の通り。数字は用例数を表す。
あらはる（1）、劣る（1）、帰る（1）、変ふ（1）、枯る（1）、下る（3）、慕ふ（1）、捨つ（1）、勝る（優る）（4）、のく（7）、詣づ（1）、参らせ給ふ（1）

（注6）成田（1983）は、現代共通語のテ形について述べたものであるが、テ形のうち最も従属度が高いものについて動詞に偏りがあると指摘する。その典型が、姿勢を表す動詞と状態を表す動詞であり、これらを併せて「様態動詞」と呼び、この動詞がテ形として用いられる場合、主節の動作主の姿勢や状態を表し副詞的に用いられることを述べている。本稿で扱う【付帯用法】の「～サマニ」も、これと並行的である。

（注7）「～サマニ」の前接動詞は以下の通り。数字は用例数を表す。
上ぐ（1）、上がる（1）、上げ下ろす（1）、あふのく（1）、言ふ（8）、行く（2）、戻る（1）、出づ（1）、往ぬ（1）、入る（1）、うちやる（2）、うつぶす（1）、追う（5）、おとしむ（1）、劣る（1）、思ふ（1）、帰る（8）、来（1）、切らる（1）、下す（1）、下る（4）、下向す（1）、死ぬ（1）、擦る（1）、立つ（1）、通る（5）、続く（1）、出る（7）、飛び入る（1）、飛ぶ（1）、直る（1）、投げやる（2）、のく（9）、上る（2）、果つ（1）、罷り出づ（1）、やる（1）、別る（1）

（注8）ただし、中古の例とは異なり、(7a) のように主体変化動詞でない例も見られる

（注9）本稿は通時的な観点からの考察であるため、中古・中世の資料と地理的に連続性のある上方語を取り上げる。また、資料的な不足の面と、後述するように近世前期上方語の時点ですでに現代の「～ザマニ」につながる用法が見られるようになることから、近世後期については現段階では考察を一旦措く。

（注10）前接動詞は次の通り。数字は用例数を表す。
上がる（1）、あをのく（1）、言う（17）、行く（3）、出づ（1）、入る（いる）（1）、受く（2）、受け取る（1）、うつむく（1）、起きる（1）、起き別れる（1）、押さえる（1）、落ちる（3）、降りる（2）、帰る（13）、下る（2）、さし出す（2）、出す（1）、立ち別れる（1）、立つ（20）、続ける（7）、出る（3）、通る（3）、取り下ろす（4）、逃げる（1）、にへいる（1）、寝る（3）、退く（3）、のく（仰向けになる）（3）、上る（1）、乗る（2）、入る（はいる）（2）、罷り出づ（1）、持ちいだす（1）、戻る（1）、遣る（1）、別れる（5）、渡す（1）

なお、近世期に入ると、漢字表記も多く見られるが、本稿では「動詞連用形＋さま」と確実に読める仮名表記のものだけを取り扱った。次のように接続する動詞の活用形が分からない上、「よう（やう）」と考えられる例が多数存するためである。これは「言うには」と解せるものである。

（ⅰ）都御所八まんの町に、貝田露程と云る物の師ありしが、さる人云様は、そなたハことの外はんじやうなれハ、きハのしまひさそらくにあらんと申されけれバ（『諸国落首咄』巻４　見事成けり物之師の仕廻）

（注11）今回は一旦考察を措いたが、近世後期になると、現代と同じような動詞に接続する「～サマニ」が見られる。

（ⅰ）若ひ者四五人、店に腰かけてこれをミて、なんと、あの侍をなぶつてミせうかといふ。一人ハ、をれハ頭をはつてミせふと、かけ行てすれ違ひさまに頭を一つはつて通りけれバ、侍ハ大きに腹を立、…（『夜明鳥』わるしやれ）

この例は「～するや否や」と解釈でき、やはり【即時用法】が現代の「～ザマニ」と直接つながるものであると考えられる。

（注12）「サマ」という名詞そのものに「～する時」という意味があることも関わりがあるのかもしれない。『角川古語大辞典』によれば、「連体形＋サマ」で、時間を表している古今和歌集の例が一例挙げられている。

（ⅰ）したはれてきにし心の身にしあればかへるさまには道もしられず（藤原兼茂）

しかし、今回みた限りではこれ以外に例を見つけることができず、また「連用形＋サマ」の形で時間を表すものは、中世末期以降にしか見られないことから、やはり本稿で述べるような「連用形＋サマニ」の【同時用法】いう過程を経て「サマ」が時間を表せるようになったと考える。また、「すぐさま」という極めて短い時間を表す副詞が近世期頃に見られるようになったことも、「サマ」の意味変化に何らかの関係があると思われる。「サマ」自体が時を表せるようになったことが一因として、こういった副詞が現れたのではないか。

（注13）神部（1992）にも、「サミャン」など「～サマニ」に繋がる語形が示されている。

（注14）調査日時：2010年９月及び2011年３月

調査地点：鹿児島市、喜入町、指宿市、伊集院町、薩摩川内市、垂水市、鹿屋市

調査例文は以下の通り。

（ⅰ）このへんは、冬は寒くて、夏は暑い（対比）

（ⅱ）困ったことがあってね、母は運転できないのよ。（前触れ）

（ⅲ）おじいさんが、酒を持ったまま入ってきた（付帯状態）

（ⅳ）雨が降って、洗濯物が濡れた。（原因理由）

（ⅴ）妹は買い物に行って、私は図書館に行った。（並列）

（ⅵ）毛糸を使って人形を作った。（手段方法）

（ⅶ）それを知っていて言わなかった（逆接）

（ⅷ）学校へ行って、勉強をした。（継起）

（注15）木部（1997）では、「セー」について「単なる順序を表す接続詞」と述べている。今回の調査結果で「原因理由」や「継起」など時間的前後関係ととらえやすいものに多く用いられていることは注目しておくべきであろうと考える。

（注16）今回扱う「～サマニ」が鹿児島方言の反映であるか否かについて、慎重に考えねばならない。しかし今回調査した範囲では、中央語には【即時用法】のような例

は見られても（17）のような継起を表す例は見られなかったことから、これらの形式は方言の反映であろうと判断した。

（注17）「かっとしう」は「次々に」の意。

（注18）例は、カタカナ部分が岩山トク氏のことばである。（　）内には共通語訳を載せ、問題となる箇所には下線を引いた。

【参考文献】

青木博史（2010）『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房

奥里将建（1938）「元禄前後の鹿児島上流方言　大和口上物語集とその検討」『方言』第８巻第２号

上村孝二（1960）「鹿児島言葉「為ッセー」「見ッセー」について」『国語国文薩摩路』５号

神部宏泰（1992）『九州方言の表現論的研究』和泉書院

木部暢子（1997）「Ⅰ 総論」 平山輝男編『日本のことばシリーズ46鹿児島県のことば』明治書院

九州方言学会編（1969）『九州方言の基礎的研究　改訂版』風間書房

小林　隆（2004）『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房

中村萬里（2001）「19世紀の薩摩アクセント」国語学会秋季大会予稿集

中村萬里（2004）「江戸幕末期の薩摩アクセント ── 安政３年生まれ岩山トク氏の談話録音テープをもとに ──」筑紫女学園大学紀要第16号

成田徹雄（1983）「動詞の「て」形の副詞的用法」渡辺　実編『副用語の研究』明治書院

仁田義雄（1995）「シテ形式をめぐって」『複文の研究（上）』くろしお出版

仁田義雄（2002）『新日本語文法選書３　副詞的表現の諸相』くろしお出版

日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法６　第11部複文』くろしお出版

【使用テキスト】

用例は次のテキストによった。また、例を挙げる際は、一部表記を私に改めたところがある。

上代：『日本書紀』『古事記祝詞』『古事記歌謡』『風土記』…日本古典文学大系

中古：『宇津保物語』『栄花物語』『大鏡』『落窪物語』『今昔物語集』『狭衣物語』『散木奇謌集』『篁物語』『竹取物語』『堤中納言物語』『日本霊異記』『浜松中納言物語』『枕草子』『夜の寝覚』『大和物語』…日本古典文学大系

『紫式部日記』…新日本古典文学大系

『源氏物語』…新編日本古典文学全集

中世：『宇治拾遺物語』『太平記』『曽我物語』『愚管抄』『増鏡』『沙石集』『義経記』『古今著聞集』『平家物語』…日本古典文学大系

『四河入海』『毛詩抄』『蒙求抄』…『抄物資料集成』

『百丈清規抄』『山谷抄』『句双紙抄』『荘子抄』『論語抄』『漢書抄』『日本書紀兼倶抄』…『續抄物資料集成』

大塚光信・来田隆編『エソポのハブラス　本文と総索引』、近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ編『天草版平家物語　語彙用例総索引』、池田廣司・北原保雄編『大蔵虎明本 狂言集の研究 本文篇』、土井忠生訳注『ロドリゲス日本大文典』

近世：武藤禎夫・岡雅彦編『噺本体系』１～16巻

『好色一代女』『好色一代男』『諸艶大鑑』『好色五人女』…新編西鶴全集編集委員会編『新編西鶴全集』

『近松浄瑠璃集』…日本古典文学大系
用例の検索にあたって、国文学研究資料館の本文データベースシステムを利用させていただいた。

謝辞　鹿児島方言調査にあたって、鹿児島国際大学の松尾弘徳氏とそのゼミ生に多大なるご協力をいただきました。ここに記して感謝いたします。

（くぼぞの　あい・本学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員（DC2））